

善庵隨筆

下

番外書冊

和書門			
一	九	九	二
二	七	三	二
冊	架	函	號

內閣文庫			
二	九	九	二
二	二	二	二
函	冊	號	類

內閣文庫		
番號	和 18992	
冊數	2 ( 2 )	
函號	212	263



善庵隨筆卷二

目錄

拈花

隅田川

式年

摩摩母

起復

服忌

求肥

研皮

羊羹

鴨立澤

俗名

僧姓

二八蕎麥

ケンドン

肥人書

薩人書

國名稱州

大尺小尺

天狗

淺草文庫

附 鄭成功傳碑

勅入書

二人書卷

勅入書

勅入書

勅入書

勅入書

勅入書

目錄

善庵隨筆卷二

善庵隨筆卷二

○宋儒ノ所謂道統ハ、禪家ノ血脈ニメ、世尊拈花迦葉微笑  
 ヲ曾子ノ一貫ニ附會スルハ、世人ノ知ル所ナレバ、今更ニ  
 イフニ及ハズ、但拈花ノ一五燈會元ニ出テ、一切經中ニ  
 所見ナシトイヘドモ、古來相承ノ説ニメ、必シモ彼徒ノ杜  
 撰セルニハアラジ、サレド彼徒ハ諸宗皆所依ノ經アルニ、  
 禪宗ニ限り、所依ノ經ナケレバ、胡亂ナル教ノヤフニ、人ノ  
 疑ハシトヲオソレテヤ、大梵天王問佛決疑經ニ出ヅルナ  
 トイヘド、其經モトヨリ世ニ無レバ、嘗テ秘府ニ藏在セル

又王安石八見シトテ、僧史誓古略卷四ニ引、梅溪集云、荆公謂蔣山建康佛慧泉禪師曰、世尊拈花、迦葉微笑、頃在翰苑、偶

見大梵天王問佛決疑經三卷、有云、梵王在靈山會上、以金色波羅華獻佛、請佛說法、世尊登座、拈華示衆、人天百萬、悉皆罔措、獨迦葉破顏微笑、世尊曰、吾有正法眼藏、涅槃妙心、分付迦

葉トアリ人天眼目卷五ニ引、宗門雜錄云、王荊公問佛慧泉禪師云、禪家所謂世尊拈花出在何典、泉云、藏經亦不載、公曰、余頃在翰苑、偶見大梵天王問佛決疑經三卷、因閱之、經文所載甚詳、梵王至靈山、以金色波羅華獻佛、舍身為床座、請佛為衆生說法、世尊登座、拈花示衆、人天百萬、悉皆罔措、獨有金色頭陀、破顏微笑、世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、分付摩訶大迦葉、此經多談帝王事、佛請問、所以秘藏、世無聞者、ト誓古略ニ依テイフニ似タリ、余王梅

溪集ヲ反覆閱スルニ、絶テ影響モナシ、又山菴雜錄卷下ニ、

明善韓先生書、陸放翁普燈錄敘草、後云、放翁先生手書普燈錄、敘草本、報恩淨上人之所藏也、余故有先生遺文二帙、其間誤處、皆手自塗了、傳燈言、世尊舉華、迦葉一笑、今講者以為經無此事、詆其忘傳、或曰、金陵王丞相於秘省、得梵王決疑經、閱之、有此語、有所避諱、故經不入藏、今先生以為書之本、葉弱行之間、不知即丞相之所見、以否、其言如此、必有所考矣、併書其後云、夫二先生學廣理明、其言豈妄、近翰林宗公、為余敘應酬錄、亦曰、予觀大梵天王問佛決疑經、所載拈花云云、宋公既親觀之、則此經世必有之、而或者詆以為妄、前云、有所避諱、故不入藏、斯言盡矣、トアルモ、宋學士集ニ、應酬錄ノ敘見ヘズ、蓋

シ王安石宋景濂ノ二公ニ托メ、信ヲ世ニ取ント欲セルニ  
テ、實ニ二公ニコノコトアリトハ思ハレズ、コレゾ彼徒ノ  
杜撰トイフベシ、故ニ濟北集卷十八ニ、智證大師、教相同異  
曰、禪宗、教相如何、答、唯以金剛般若維摩經、而為所依、以即心  
是佛、而為宗、以心無所著、而為業、以諸法空、而為義、始自佛世、  
衣鉢授受、師師相承、更無異途、嗚呼、珍公何不思、自語相乖哉、  
已言自佛世、衣鉢授受、師師相承、何還以維摩金剛為所依乎、  
因諸宗各有所依、將以為禪門亦有所依乎、蓋三論者、依中百  
門也、法相者、依楞伽深密及唯識也、天台者、依法華也、賢首者、  
依華嚴也、此諸宗依於經論者、宜矣、何者、像法諸師、取經論意、

而立宗也、我禪門不然、如來命、飲光傳、心印、爾來師師衣鉢授  
受、以為法言、何暇求所依、而取金剛維摩乎、若有所依、非佛心  
宗、珍公不聽禪宗、比擬諸宗、臆度分別、出所依者、實可笑也、云

云ト論セリ、況ヤ今世ニ所傳ノ大梵天王問佛決疑經ハ、大  
天王問佛決疑經、全軸二十四品、分為二本、云、是陸奧國南部  
花卷玉鳳山瑞興寺、無著靈光禪師、所秘藏本也、享保十二  
年丁未仲夏、靈光所誌、凡例十件、附之、享保二十年乙卯閏  
三月、尾張國鷲頭山長壽禪寺、東澧道解、後序アリ、或曰、相  
傳、斯經所珍藏、本邦有三所、其一、奥州平泉光堂、經秀、衛廟、處、其  
二、濃州郡上郡長瀧村長瀧寺、古刹、其三、攝州水田三寶寺、忍能  
者、為洞宗、今靈光所傳、文義淺薄、二、西土人ノ偽作マデモナク、  
邦人ノ涅槃經ニ依、偽造シ、台嶺慈覺大師、曾自大唐抄來、在

某國某寺ナド、附會セシニテ、信用スベカラス、此經ノ偽

造ナルトハ、空華隨筆ニ論ジアリシ歟ト覺ユ、併攷スベシ  
○隅田川ハ紀ノ國ニモ、駿河ノ國ニモ、下總ノ國ニモア  
リテ、何レモ和歌ノ名所ナリ、紀伊ノ隅田川ハ伊都郡ナル、  
待乳山下ノ、待乳川ノトニテ、其源ハ大和ノ國、葛城山ヨリ  
出テ、北隅田ノ庄ヲ流レテ、紀ノ川ニ落レバ、待乳山ヲ隅田  
川ニ詠合スルハ、左モアルベシ、駿河ノ角田川ハ、清見寺ノ  
西ニアル、今ハ旗打川トイヘル川ニテ、此邊ハ庵原郡ニ屬  
シ、イト海近キユヘ、庵原崎トイフヲ、略メ庵崎トモ、磯崎ト  
モイヘバ、庵崎ハ駿河ノ角田川ニ限リタル名所ナリ、然ル  
ヲ辨基法師ノ地理不案内ノ上カラ、待乳山夕越乃ハ庵崎

の角田川系よ、ひとりうもゆんトコノ歌井蛙抄ニハ紀伊トシ、契冲阿闍梨ハ駿河ト  
ト、紀伊モ駿河モ、混同メアヤマルルヲ、本歌トシ、都人ノ居  
ナガラ名所ヲ知り顔スルヨリ、角田川トサヘイヘバ、待乳  
山モ庵崎モ、アルベキハツノ様ニ思ヒテ、ソレト定ムベキ  
地モナキニ、待乳山ヤ庵崎ヲ、角田川ノ景物ニメ、詠合スレ  
バ、後人其歌ニ本ヅキ、コレゾ待乳山ナリ、庵崎ナリナド、名  
所舊跡ヲ、杜撰附會スルコトニハナリシ、  
○白樂天ノ謠曲ニ、孝謙天皇の御宇かよ、大和の國、高天  
寺ふとむ人の、志さるの春水頃、新橋の柳小營の、来りてゆ  
勢とすけば、初陽毎夕来不遭、還本橋とゆく、文字ニ寫し

乞以見まば、三十一字の証飲の云系ありたり、初陽の  
と毎小ハ来まとも、ゆゑてどうも、もとの極ふや、ゆゑの  
るとトアル、此ある年ノ字、古人モ明解ナク、字形近似セル  
ヨリ、或年ノ誤寫ニモアラシ、ナドイフ説モアリテ、義ニ害  
ナケレバ、知レザルコトニテ、濟ミ來リツルガ、先年予ガ門  
人大森快庵ヨリ、朝鮮人ノ畫幅ニ、甲子式年、槐陰長契圖、ト  
題スルヲ以テ、予ニ鑒定ヲ乞ヒ、且其解ヲ求シニ、予尺牘ニ  
テ、甲子歲、開場、取士、是其常式、故曰、式年、云々ト答へ遣ハシ  
ケルハ、一時ノ臆説ニメ、別ニ所證ハナカリシガ、其後小雲  
棲稿ヲ讀シニ、卷十二、與成士執、科舉問答ノ條ニ問、玄川云、

小科、則以子午卯酉、間三年、取二百人、名式年トアレバ、甲子  
ハ常式ニ、及第ノアル歲ユヘニ、式年トイヒシコト明白ナ  
リ、本邦モ古ヘ及第ノアル歲ヲバ、ヤハリ式年ト、朝鮮語ヲ  
用ヒテイヒシニヤ、及第ノアル歲ハ、國子生ナト、一同勉學  
シ、誦讀ノ聲、日夜不絶ヨリ、勸學院ノ雀ハ、蒙求ヲ轉ル、タト  
ヘノ意ヲ以テ、鶯ナトモ歌ヲ詠ズ、トイハシタメニ、式年ト  
ハ書シニヤアラシ、

○生母ニアラズメ、子ヲ養育スル母ヲ、マ、母トイヒ、生子  
ニアラズメ、養育ヲ受ル子ヲ、マ、子トイフ、マ、ハ養育ノ  
義ニテ、小兒ニ乳ヲ飲付スル、今ノ乳母ノ事ナリ、コレヲ古

へ、乳付ケトイフ、東鑑ニ、武衛頼朝卿乳付ケノ青女ヲ召サ  
ル、摩摩ト號ス、トアルニテ知ルベシ、コレヨリ轉稱メ、小兒  
ノ乳ヲ飲ムヲ、マ、ト云ヒ、今ニテハ小兒ノ飯ヲ喫スルヲ、  
モマ、ト云フニハナリシ、

附洛東隱士慈延ノ隣女晤言卷二ニ、蓬生卷よごまゝの  
此たまひとちりもありと云く、又淳亦卷ふも、まゝと  
いへるところ、三ところむりあり、細流小乳母の名乃  
申す小、釋一たぐさハたうへも、也是軒の抄ふ、めおとと  
ハまゝととてかへてなぐくるといふとをか多へる、  
さうしてハ物語の才ふても、まゝえめさきととあり、又陸

奥出羽の方ふてハ、とけ世も、乳母ととゞまゝとよふ  
かり古治の抄るまゝいかりふまゝさ之、雅語あり、海とも、  
さう樂水狂云ふ、とのが妻は、おんかとも、とよぶハむ  
う一都めて、妻と女どもと、人小對してハ、心ひりなるべ  
し、おんも陸奥出羽おんか人ハ、おん人ふむうひてハ、と  
のが妻とおんかどりといへる、

○起復ハ正禮ニ非ズ、止ムコトヲ得サルニ起ルナリ、故ニ  
石林過庭録ニ、至和間、富鄭公爲相、以母喪去位、時久無以宰  
相持喪者、昭陵意大向公必欲起復、詔再下、再力辭、上以盧朱  
崖薛文惠故事、切責有云、以相國之尊、而守匹夫之節、任天下



之重而爲門內之私、朕所不取也、且命中人督公起、非同就道、不得先還、公復抗章言天下無事、宰相奉行常務、豈可與大宗時比、中書樞密院臣僚韓琦等平居皆嘗與臣論起復不是好事、今在嫌疑之地、必不肯爲臣盡言、惟斷自聖意、上知其不可奪乃已、トアリテ、皆然ルヘキコトナリニ、漢書翟方進爲丞相、遭後母憂、既葬三十六日、除服起視事、以爲身備漢相、不敢踰國家之制、注師古曰、漢制自文帝遺詔之後、國家遵以爲常、大功十五日、小功十四日、總麻七日、方進自以大臣、故云不敢踰制、トアリテ、強起就職、ノ日限マテ、上ヨリ定メアリ、故ニ出仕スルニ、朝服ヲ異ニメ、情ヲ表スルナリ、朝野雜記ニ、故

事大臣奪情者服慥、光憤黻紫袍皂革帶、道君惡之、政和末、始議以入公門、不應變服、遂以吉服朝、然居家猶喪服也、紹興初、朱藏一起復、右僕射請所服、太常援政和近事爲請、而居第則慘服去佩焉、議者不以爲是、孝宗之喪、趙子真當國、始令群臣服白涼衫皂帶以治事、逮終喪乃止、論者以爲是、及光宗之喪、禮部侍郎陳宗召復、請百官以日易月、禫除畢、服紫衫皂帶以治事、從之、及ヒ談錄ニ、李宗諤云、先公周顯德末、翰林學士起復、裹素紗軟脚幞頭、黻紫公服、每入朝猶佩魚袋、或曰魚袋者、取事君夙夜匪懈之義、然以金爲飾、亦身之華也、居喪奪情、不當有金銀之飾、公遽謝不敏、ナドノ禮制アリ、五代史ニ、鄭慶

餘嘗採唐土庶吉凶書疏之式雜以當時家人之禮為書儀兩卷明宗見其起復之制歎曰儒者所以隆孝悌而敦風俗且無金革之事起復可乎トハアリカタキコトナリ余本朝忌免ノコトニ感ズルユヘ此ニ鈔シ出シ又本朝ノコトハ別ニ論ズ

○皇朝ノ古ヘ律令格式等何事モ唐ノ制ヲ遵用セラレシコトナルニ獨リ服紀令ノミ凡服紀者為父母及夫本主一年祖父母養父母五月曾祖父母外祖父母伯叔姑妻兄弟姊妹夫之父嫡子三月高祖父母舅姨嫡母繼母繼父同居異父兄弟姊妹衆子嫡孫一月衆孫從父兄弟姊妹兄弟子七日ト

一年五月三月一月七日ノ五等ニ服紀ヲ建ラレシハ唐土古今ニ其制ヲ見聞セズ皇朝ノ創制ナルニヤ若シヤ三韓ナドノ法ヲ用ヒシコトモアラシ歟ナド疑ヒシニ東國通

鑑卷十高麗紀成宗文懿王乙酉四年宋雍熙二年冬十月新定五服

給暇式斬衰齊衰三年給百日齊衰期年給三十日大功九月

給二十日小功五月給十五日總麻三月給七日トアリ暇ハ

休暇ノ暇ニメ奉公ヲ免シ家居メ喪ヲ行フノ暇ヲ給フヲ

給暇ト云フ神祇服紀令ニ暇俗號荒忌トイヘバ今日所云

ノ忌ノ一ニテ忌トイフ稱ハ神祇服紀令ヨリ出シ詞ナル

ベシ拾芥抄ニ假寧令ヲ引テ凡職事官遭父母喪竝解官自

餘皆給暇夫及祖父母養父母外祖父母卅日三月服卅日一月服十日七日服三日ト云フ今ノ令ハ養父母已下ノ二十四字ヲ脱ス補フベシ塙氏校刻本ニハ此二十四字アリコノ文ニヨレバ父母ノ喪ハ竝ニ解官メ給暇ノ一十久一年ノ服ヲ受ケシム尤モ本生父母ニ限ル一ニメ養父母ハコノ例ニアラズコレ先王以孝治天下萬代不易ノ難有制度ナラズヤ法曹至要鈔ニ假寧令說者云問僧尼遭父及餘親喪何處分答於僧尼不見給暇法於父母無疑矣トアルト僧尼ハ世外ノ人トイヘドモ服紀爲父母一年ナル一疑ヒナシ給暇ノ法ハ不見トアルニテ父母ニ給暇ノナキ一知

ルベシ今ノ服忌令ニ父母忌五十日トアルハ先王ノ令ニハナキ一ナリ何レノ代誰人ノ立テシ法ナルヤ文保記永正記ナドニ父母并夫暇五十日十三个月トアレバソノ時代已ニ專ハラ行ハルコト思ハル令ニ祖父母養父母暇三十日服三個月九十ナレハ本生父母ニ暇ノナキ理ハアルマシ本生ノ父母ハ養父母ヨリ一等重クメ暇五十日ニテ相當ナルベシナド心得違メカク杜撰セシニヤアラシ高麗ノ制ハ五服ヲ建テ暇ヲ給ヒ暇モ亦本朝ト異同スルハ蓋其損益スル所ナラン但シ成宗ノ四年乙酉ハ宋ノ雍熙二年ニメ皇朝花山天皇ノ寛和元年ニ當リ文武天

皇ノ元年令律修撰、既訖施行天下セシヨリ、二百八十五年  
 後ナレバ、高麗反テ皇朝ノ制ヲ受ルニ似タリ、コトニ新  
 建トアレバ、コレヨリ前高麗ニ、此式ナキト知ルベシ、  
 ○菓子ニ名ヅクル、牛ノ皮ニ似タレバトテ、牛皮トイヒ、犬  
 ノ皮ニ似タレバトテ、犬皮トイヒ、羊ノ肝ニ似タレバトテ、  
 羊肝トイフ、古人ノ純素樸率、思ヒヤルベシ、後人ノ物忌ヒ  
 スル心ヨリ、文字ノ不潔ナルヲ嫌ヒ、牛皮ヲ求肥石川文山  
翁ノ北山  
 紀聞卷一、詩教ニ云、京ヨリ到來トテ、牛皮飴ノ籠ヲ、手ヅカ  
 ラ出メ、華人ナラハ幾クノ詩賦カアラシカ、桑城ニハ、未ダ  
 詩ヲキカズ、何サマ案ノ見ルベシトテ、一笑シヌ私ノ云、牛  
 皮ノ字ヲサヘ忌テ、近來求肥トカク位デハ、詩ハゴザアル  
 マジトイヘバ、翁、犬皮ヲ研皮筆の周や英老上よ云く、松風  
とひふ菓子とみふの俗俗ハ  
 赫赫タリトアリ、

犬皮ト唱ふ、半皮ふじうへう名かるべし、其の字と忌て、  
 今ハ研皮ト作す、或人云く、見肥の字ふかへかばよけんと、  
 羊肝ヲ羊羹ト、音ヲ假テ、文字ヲ易ヘ、其實ヲ失フニ至ル、

附 犬皮ヲ松風ト名ツクルワケハ、橘庵漫筆卷四ニ云ク、

干菓子干菓子の松風ハ、初免糸都より製し出し、或法方江津縁  
 とをきりしよ、清覧有て、松風と號給ふ、其心ハ、表小大の  
 別ツヨク焦し跡泡立し所とけしとゆるなど、いふくの斐あま  
 ど、うらハ鏡ととして、換振かく、うら寂委委ふよりて、松  
 風とハ名付け給つりと、

○西行ノ鴨立澤ノ歌ハ、モト澤邊ニ鴨ノ立テル、秋ノ夕暮  
 ノイト淋シク、物哀レナルサマヲ詠セシ、實景ノ歌ニメ、鴨



廻小雜記一卷、一名宗紙回國記と号して、亦本六卷小分  
ち、法源杜多の序文と附と、大分誤まり、こゝにハ准后道興  
の清作あり、文中と考へてあつてトイヘド、余ハ准后  
道興ノ作トイフ説モ、覺東ナク覺フ、其時代ヨリハ、後ノ  
物ト思ハル、

○今ノ俗名トイヘルモノ、吾日本ニテ古ハ字トイフモノ  
ニ當ル、萬葉集第十六本朝世説奥羽軍記等ニ載スル所證  
スヘシ、本朝世記、康治二年記曰、六月十三日、戊戌、源賴  
盛字檜垣三郎、源惟正字、辻三郎、忽企、合戰云云、中古  
文政行ハレシヨリ、縉紳家モ文アレハ、漢土ニ擬メ名ノ外  
ニ字トイフモノ出來ス左レトモ爵位官職ト、實名ニテ通

用スレバ、人毎ニ字アルニモ非ズ、好事ノ上ヨリ、私ニ文詞  
上ニ稱セシマデナリ、故ニ鎌倉時代ノ頃マデハ、民間ニテ  
ヤハリ今ノ俗名ヲ字ト稱セシ、古文書等ニ毎見ユ、慶  
元以來、文人學士ハ、必ズ俗名ノ外ニ、唐人同様ニ字アル  
ナレバ、今更ニ古ノ例ヲ用ヒテ、俗名ヲ字トモイヒガタシ、  
左レバトテ、俗名俗稱ノ字ハ、和漢トモ所見ナシ、因テタゞ  
稱□□□ト書キタラバ、當リサワリ無カルベシ又漢土ニ  
小字トイフモノアリ、今古奇觀ニ小名、宋金郎、官名、宋金ト  
アリ、官名トハ公邊ニ用フル、表向ノ名ニテ、實名トイフカ  
如シ、小名トハ民間ニ呼習ハシタル、平生ノ通名ナリ、コレ

證トスルニ足ルヤフナレドモ、他書ニ載スル小名小字ハ、大抵幼少ノ時ノ子供、名ナリ又侍兒小名録ニ載スル小名ハ、此方ノ人、タトヘバ家ニ居ルトキノ名、女子ナレバ阿松トカ、阿梅トカイヘルカ、諸侯方ニ奉公スレバ別ニ名ヲ賜テ尾上トカ、岩藤トカ改ム、ソノ奉公中ノ名ヲ小名トイフカク一定セザレバ一ヲ取テ證トシ用ヒカタシ、

○僧ノ姓ヲスヘテ釋トイフコトハ、道安ヨリ始マル、開元録云、秦晉已前出家者、多隨師姓、後彌天沙門道安云、凡剃髮、染衣、紹釋迦種、即無殊姓、空悉稱釋氏、時皆未然、迫譯出阿舍經、云佛告比丘、四大河水入海、無復本名、同名為海、四姓之子

於佛出家、剃除鬚髮、著三法衣、無復本姓、但云沙門釋子、增一阿舍

經卷二十一、佛言、今有四大河從阿耨達泉出、為四、所謂恆河、新頭婆、又私陀、四河入海、無復本名、俱名為海、四姓出家、言釋子、トアルニテ知ルベシ、

○蕎麥ハ冷物コヘ、脾胃虛弱ノ人ニ空シカラ子ハ、大小二麥ト一樣ニ常食ニ充ツベキ物ニ非ス、シカシ土ノ肥瘠ヲ

論セズ一候七十五日ニメ實熟シ、凶荒ノ備ニハ甚便空ナ

ル故ニ、天工開物云、蕎麥實、非麥類、然其為粉、療饑、傳名、為麥、則麥之而已、續日本書紀ニ養

老六年七月戊子、詔曰、今夏無雨、苗稼不登、空令天下國司、勸課百姓、種樹晚禾、蕎麥及大小麥、藏置儲積、以備年荒、又續日

本後紀ニ、承和六年正月七日、令畿内國司、勸種蕎麥、以其所

生土地、不論沃瘠、收穫只在秋中、稻粱之外、足爲食也、ナドアリテ、先王天下ノ國司ヲメ、百姓ニ勸種セシメ給ヘバ、其後トテモ、諸國ニテ蕎麥ヲ種テ、凶荒ニ備ヘ、二麥ノ助トナセシカト、其頃ハ蕎麥搔餅又ハ蕎麥燒餅ニ作メ、食料ニ充シニテ、今ノ蕎麥切ナトヤフノ物ハナカリシニ、鹽尻ニそば切ハ、甲州めて天目山へ集法多うりし時、而の氏集法の徳人小食と賣りるふ、末まはくならりしゆへ、そはと移りてとことせし、ま後うごんと學びて、今のそは切とハなりトアルニテ見レバ、寂初ハ蕎麥搔餅或ハ蕎麥燒餅ニ製メ、旅籠トセシガ、後ニハ溫鈍ニナラヒテ、湯餅ト作セシト

ナリ、西土ニテモ、農政全書ニ、王楨カ農書ヲ引テ曰ク、北方山後諸郡多種、治去皮殼磨而爲麩、焦作煎餅配蒜而食、和名鈔或作湯餅謂之河漏、滑細如粉、亞于麥麩トイフ、焦作煎餅配蒜食之ハコレ蕎麥燒餅ナリ、或作湯餅謂之河漏ハコレ溫鈍ニナラヒテ、湯ニ入レテ、コレヲ烹ルモノニメ、即チ蕎麥切ナリ、但シ溫鈍ノ如キハ、湯餅ト作メ食フベケレド、蕎麥ハ湯ニ入テ烹レバ、切切ニナリテ、片ヲナスベカラズ、因テ思フ當時二ハ蕎麥ト云テ、蕎麥粉二分、溫鈍粉八分、八分ト二分トノ調合ニスルハ、溫鈍粉ヲ多クメ、切レザルヤフニセシニヤアラン、  
今ノ人二八トイフハ、價ノコトニテ、今蕎麥一膳ヲ十六文ニ賣ルユヘニ、二八



十六文ノ義ト心得ルハ誤ナリ、其頃ハ未夕諸品下直ユヘ  
 蕎麥ノ價モ十六文ニテハアルマジ、還魂紙料ニ寛文八年  
 ノ頃、江戸ノ流行物ヲ集メ、短歌ヲ載テ、八文のけん  
 どん、や又かゝる男、頭、年、短歌、杯、お、け、け、け、む、む、  
 と、ば、切、麻、の、子、も、多、く、一、年、三、蒸、釜、む、け、は、切、一、張、七、又  
 トアルニテモ、當時蕎麥一膳ノ價十六文ニアラサルヲ知  
 ルベカク二八ノ調合ニテハ、温鈍ニ近ク、蕎麥タル詮ナケ  
 レハトテ、新ニ蒸蕎麥トイフモノヲ工夫ス、其製法ハ蕎麥  
 粉ヲ冷水ニテ、ヨク洩合セ、麩棒ニテ按擗ゲ、フタ、ビ棒ニ  
 捲テ、連ニ打ツコト數遍、熨メ薄片トナルヲ、剝メ線トナシ、  
 沸湯ニ入テ、煤上ケ、冷水ニテ洗ヒ、フタ、ビ蒸籠ニ入レ、蒸  
 メ露氣ナカラシメ、煎和ノ醬油ヲ以テ、大根ノ絞汁、山葵海  
 苔等ヲ配メ食フ、西土ノ河漏ハイカ、製スルヤ、此方ノ蒸

麥トハ同ジカラザルヤフニ思ハル、此方ニテハ、温鈍モ蕎  
 麥切モ、モト菓子屋ニ屬メ、菓子屋ニテハ、船切重詰ニメ、賣リ  
 シユヘニ、菓子屋ノ杜氏ハ、必ラズ蕎麥ヲ打ツ筈ノモノナ  
 リ、今ニコレヲ以テ、杜氏ノ巧拙ヲ試ルハ、昔ノ餘風ノ存セ  
 ルナルヨシ聞及ヘリ、寛文ノ頃、ケンドン温鈍、盛ニ行ハレ  
 シユヘ、蕎麥モ温鈍ニナラヒテ、ケンドンニセシナリ、ケン  
 ドントハ、俗ニ生質温和ニメ、財利ニコセツカザル者ヲ、オ  
 ントウトイフ、オントウトウ、ケンドント、音ノ近キヲ以テ、此  
 ウンドンハ、ウンドンナラデ、ケンドンナリトイフ意ニテ、  
 一杯盛切ニメ、カハリヲ出サズ、給使モセザルヨリ、ケンド

ントハイヒスコレヲ便利ナリトテ賞翫シ下下ノ者トリ  
 バヤシ盛ニ行ハレシヨリ温鈍屋蕎麥屋ナドイフモノ逐  
 逐ニ出来又故ニ昔昔物語ニ寛文辰年<sup>四</sup>けんどん<sup>年</sup>とは切  
 とりの物出来て下と買喰ふ者人ハ喰者かトアリテ  
 用捨箱ニ昔ハ温鈍<sup>シ</sup>ワレテ温鈍の旁ハ蕎麥切と賣る今  
 ハ蕎麥切堅小なりて<sup>シ</sup>温鈍と賣るけんどん<sup>屋</sup>とい  
 ふハ寛文中より<sup>シ</sup>温鈍とも蕎麥屋といハ近々享保の頃  
 までもなトイヘリ  
 ○中古小學問ノ有シハ民間便用ノ爲ニ皇國人ノ字音五  
 十字ヲ唐國ノ楷書點畫少ク或ハ點畫ノ中ニテ點畫ヲ省

キ、畫少ク書易キ様ニ制シ國音ノ五十音ヲ寫シ取リ譬へ  
 ハ天ヲアメ地ヲツチ凡山海風雨ノ類文字有ラシメ是ヲ  
 肥人書ト名ク仁和寺書目ニ肥人書五卷トアリ蓋シ肥ノ  
 國ニ古ヨリ傳フル所ノ文字ナリ纔ニ五卷ニテ天下ノ字  
 音盡スヘカラスト雖モ是ヲ以テ例セハ皇國ノ言葉ハ盡  
 スベシ今ノ字引節用ノ如ク只義理ニ拘ラズ文字ノ連續  
 ヲ教フルノミ故ニ五卷ニシテ足レリ釋日本紀ニ大藏省  
 御書ノ中ニ肥人ノ字六七枚許リアリ先帝令寫給<sup>テ</sup>其字皆  
 用假名或其字未明乃川等字明見之ト云リ今考ルニ乃川  
 ノ二字片假名ノ外ニ存ヌルモノナシ是レ肥人書ハ片假

名ナルノ證據ナリ、故ニ是ヲ肥人書ト云ナレバ、萬葉集十  
一卷ニ、肥人ヲ高麗ト釋セリ、肥ト高麗トハ、南北一帯ノ海  
ヲ隔ルノミニテ、皇國人ノ高麗ニ住シ、高麗人ノ皇國ニ歸  
化在住ノモノ多シ、高麗國ニテハ、唐國ト久シク朝聘往來  
シテ、上下凡唐國ノ文字ヲ、知リタルモノ多ケレバ歸化ノ  
人ノ中ニテ、唐國ノ字ヲ五十音ニ製作シテ、日用ニ便利セ  
ントテ、教ヘタルナルベシ、去ナカラ、夫ハ國音五十字ニ寫  
シ取ノミニテ字ニ義ノナキトハ、西洋ノアベセテト一樣  
ナリ、又古來ヨリ相傳フルノ説ニ、片假名ハ皇國ノ楷書、薩  
人書ハ皇國ノ草書ト云ル説ノナキトハ云ベカラズ、薩人

書ハ國音ヲ四十七字ニウツシ取、今ノ平假名ナルベシ、義  
ハ肥人書ト同用ニシテ、字ニ義ハ無リシヲ、吉備大臣五十  
音ヲ、唇舌牙齒喉ノ五音ニ分チ、十行ニシテ、輕重清濁、天下  
ノ字音、縱橫錯綜シテ、盡ザルトナキ様ニナシ、玉フハ、吉備  
公ノ可謂神智、いろはモ、弘法大師四十七字ノ國字ヲ以テ  
長歌トナシ、いろははにほへとありぬると、わかよたれとつ  
ねならむ、うわのねくやまけふこけて、あささやめみゝを  
ひもせすト、誦讀ニ便ナラシムルハ、大師ノ所爲ナリ、是ヲ  
タトヘハ、唐國ニテ梁武帝ノ頃、王羲之ノ書、一字或ハ二字  
錯雜混亂メ、次序ナカリシヲ、周興嗣ニ命セラレ、次韻セシ

又テ千字文トナシ人ヲメ誦讀シ易カラシム、是ト同様ノ例ナリ、

○吾六十六箇國ヲ西土ノ州ニ擬メ、武藏ヲ武州、攝津ヲ攝州トイフノ類ハ、皆文人一時ノ隨筆ニ出デ、其稱ヲ雅ニシ唐メカサントスル迄ニメ、刺史牧伯ナト、同ジクモトヨリ官白リ建ラレシ、定稱ニアラサレハ、六國史ハ勿論正史等ニスヘテ此稱ナシ、サレバ文人ノ稱スル所モ、己カ隨意一樣ナラザル也、故ニ今但馬ヲ但州トイフナルヲ、馬州ト稱シ美濃ヲ濃州トイフナルヲ、美州ト稱セシハ、夏山雜談ニ、本朝文粹ヲ引テ云ヘリ、夏山雜談卷五ニ、今ハ但州ト書テ、昔ハ馬州ト書タルニヤ、

本朝文粹ニ、山井中納言但馬國ニ流サレテ、才ハセシカ、歸京ヲユルサレムト請ヒ給ヒシ狀ニ云、嗚呼昔侍鳳闕、已爲羽翼之臣、今在馬州、長爲芻蕘之士云云、又今ハ濃州ト書テ、美州ト書タルニヤ、大江匡衡朝臣ノ、美濃守源賴光朝臣ニ報スル書ノ宛所ニ、謹上美州刺史硯下ト見ヘタリ、コレノミナラス、弘法大師正傳

卷ニ載スル、贈陸奥、德一菩薩書ニ、陸州、德一菩薩法前謹空、

トアルハ、今イフ奥州ナリ、日蓮ノ録内御書ト云ヘル書ニハ、今イフ房州ヲ安州、日蓮ト書キ、鹽尻ニ小鼻廣林ノ張州年中行事ト云フ書ヲ引用ス、今尾州トイフナルヲ、張州ト書ケリ、コレニテ其定稱ナキヲ推知スヘシ、サレド今ハ關東ニテ、官ニモ州ノ稱ヲ用ヒ給フ様ニ思ハルレト、流俗ニ從テ稱セラレ、ニテ、睨ト制度ニ建シニハアラシ、

○西土ノ人ハ瑣細ノ事迄モ何カレトナク、記載シ、餘ス所  
ナキ様ナレト、文ニ過テ反テ實ヲ失フノ弊アリ、邦俗ハ文  
不足メ傳フヘキヲモ、傳ヘザルノ弊アリトイヘトモ、朴實  
善ヲ守ルヨリ、反テ古ヲ存シ、考證ノ資ケトナルトアルナ  
リ、今一事ヲ舉テイハ、吾邦古ヘ唐制ニ倣ヒ、尺ニ大小ノ  
二様アリ、大尺ノ一步ハ五尺、小尺ノ一步ハ六尺、コレ五尺  
六尺ト、名ヲ異ニスル迄ニテ、大尺ノ五尺ハ、小尺ノ六尺、小  
尺ノ六尺ハ、大尺ノ五尺ニテ、度ノ長短ニ變リハナシ、タ  
地ヲ度ル尺杖ハ、大尺ノ五尺ヲ用フルトニメ、雜令ニ凡度  
地五尺ヲ爲步トアリテ、定制ノ様ニ思ハル、ナレト、時ニ

臨デ小尺ヲ用フルトモアルニヤ、令集解ニ和銅六年二月  
十九日ノ格ヲ引テ、其度地以六尺爲步トモ見ヘタレバ、當  
時大小ノ二様ト、リ交ゼ通用スルトナリシ、御イヘニテハ、  
紛ハシキ故ヲ以ニヤ、慶長年中ヨリ、槩メ小尺ノ六尺ヲ用  
フルヲ制度ト爲シ給ヒヌレト、昔ヨリ大尺ノ五尺ヲ以、檢  
地セシ所ハ、別ニ檢地帳ヲ書改ムルト無モ、其儘ニテ差置  
レ、若シ新ニ檢地スルトキハ、必ズ御定法通り、六尺一步ノ  
間竿ヲ用フルニゾ有リケル、然ルヲ地方懸リノ有司文字  
無エヘ、一步ヲ一分ト心得違シ、間竿ニ一分ノ有餘ヲ加ヘ  
一間六尺一分トシ、二間竿ニメ、一丈二尺二分ヲ用ヒシヨ

リ、遂ニハ御規定ノ様ニ心得今日ニ至テハ、六尺一分天下ノ制度トナリタリ、廣大ナル地面ノ上ニテ、何ノ損益アリテ、一分ヲ加ヘ給フノ理アラシヤ、六尺一步ナレバコソ、今ニ檢地帳奥書ニ、六尺壹歩之間竿ヲ以テ、壹反三百歩ノ積、御檢地相極ト書來ルヲナルヲ或人ノ六尺一分ト書テ、指出セシト有シニ、該府ニテ壹歩ト書ク、仕來ノ法ニ相違スルトテ、歩ノ字ニ書直シ、被申付之由、故ニ縣令モ其跟官モ、何ノ故トモ知ラズ、只此歩ノ字ノミニ限り、分ノ字ニ書クマシキトノ様ニ心得、堅ク先規ヲ守ルヲニソ有リケル若、容易ニ分ノ字ニ書改メナハ、今日ニ在テ、誰カ六尺一步

ノ歩ナルヲ知ルベケンヤ、

○此方ニ天狗ト云ヘルモノ、西土ノ天狗ト、同名異物ナリ、混稱スベカラズ、世ニ天狗ノ所爲ト云フヲ見ルニ、變幻自在不可思議ナルトノミニメ、何物ト名狀シ難ク、魑魅魍魎ニ比スレバ、巧ナルト多クメ、其人ヲ蠱惑愚弄スル模様、大ニ狐ニ髣髴タリ、因テ思フニ、太平廣記、其外歷代ノ小説類ニ多ク狐妖ノヲ載ス、狐ニモ天狐白狐玄狐トテ、各各年數ヲ以テ差別アリ、天狐、其最古キ狐ニテ、精神ノミ存在メ形ハナシ、故ニ物ニ托メ、種々ノ奇幻ヲ爲シ、一瞬千里、風ノ如ク往來ス、此方ノ天狗モ、或ハ僧、或ハ山伏ナド、種種ニ形

ヲ幻シ、奇變ノ巧ヲ以テ、人ヲ盡惑スル、一ニ天狐ニ同シ、モ

シヤ天狗ハ、天狐ニテハナキヤ、世ニ天狗ト云ヒ傳フル、小

田原ノ道了權現 永平寺六代通幻寂靈大和尚ノ弟子了菴

フ、大力僧アリ、平生ノ行迹ニ、不思議ノ事ニ托メ試ミ給フ、十

尚兼テ其凡人ナラザルヲ察知シ、事ニ托メ試ミ給フ、十

トアリシカ、遂ニ生ナガラ小天狗ニ成レリト云ヒ傳フ、小

田原記卷ニ云、永祿三年八月、足柄ノ城御普請、御巡見ノ爲

ニ氏康御馬ヲ出サル御歸リニ、關本ノ最乗寺ヘ御參詣ア

リ當寺ノ開山了菴和尚、此地ニ山居アリシヲ、大森寄栖庵

常ニ信シ、此寺ヲ建立シケル、サレバ關東奥州マテ、此和尚

ノ法孫トメ、諸寺悉ク當時ノ住持ヲ勤メ、一年替リニ輪番

ナリト、今案スルニ、了菴和尚最乗寺ヲ開基セシヨリ、又三山

後大慈院報恩院ヲ逐逐ニ開基メ、今ハ三山トナリ、又三山

トモ輪番持ナリ、最乗寺ハ二十五ヶ寺ニテ、一年ツ、一寺

輪番ス、昔シ道了ノ真影ハ、小天狗ノ狐ニ跨ル圖ナリシヲ、

美濃龍泰寺某和尚輪番ノ頃、カク道徳イミジク、靈驗イチ

ジルクオハシマシ、魔形ヲ具スルハ、然ルベカラズトテ、明

覺道了和尚ト、和尚號ヲ追贈シ、真影ヲ改メ、今ノ銅印ヲ用

ユルトニナリシトゾ、今茲辛丑ヲ距ル、六十餘年前ノ

ナリト 信濃ノ飯綱權現 甲斐郡内、上吉田村、富士山神職、小

開久、飯綱淺間ノ三銅像アリ、飯綱モ道了ト同シク、小天狗ノ

了飯綱、跨リタル像也ト云フ、因テ思フニ、護園遺編ニ、イヅナ

ハ信州ノ山名也、イタビキニ天狗ノ祠アル故ニ、山ノ名ヲ

以テ、其法ニ名ヅク、其法ハ天竺ノ茶普尼天ノ法ナリ、法ヲ

行フニ、抹香ヲタケバ行ハレヌト、コノ茶普尼天ノ法モ、狐

ヲ驅役スルモノニツヤ、古今著聞集ニ、知足院殿何事あて

久、大権坊トシ、効驗の倍此有る、小蛇祇厄の法を以て、

チ、大権坊トシ、効驗の倍此有る、小蛇祇厄の法を以て、

の懇切乃、日限を以て、あつて、あつて、あつて、あつて、

ル、七日、法を以て、あつて、あつて、あつて、あつて、

ま、小の、あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、

三





說アリテ、キツ子トハ訓セシナラン、頃日皆川淇園ノ有  
斐齋劄記ヲ閱スルニ、野狐最モ鈍、其次氣狐、其次空狐、其次  
天狐、氣狐以上皆已無其形、而空狐其靈變更倍於氣狐、至天  
狐則神化不可測、人有爲物所役頃刻行千里外者、乃皆空狐  
之所爲、大抵離地七丈五尺、彼乃得攝之行、如天狐乃不復爲  
人害、此說善幻者話云トアリ、今此ニ言フ氣狐ハ野狐ノ人  
ヲ蠱惑メ崇ヲ作シ、人身ニ馮テ食ヲ求メ、及道士ノ驅役ス  
ル、才サキ狐ナルモノニメ、空狐ハ即天狗ナリ、彼此併攷ス  
レハ、天狗ノ狐タルヲ疑フベキナシ、

附西北域記ニ狐之族七、蒙古産者ニ毛黃而長曰草狐、短

而黠曰夜沙狐、沙狐、賺曰天馬皮、領曰烏雲豹、其曰金雲豹

者、西産也、俄羅斯産者五、絨黑、而毫白曰元狐、其次身黠音

毫也、而賺黑曰獨刀、又其次身黠音黃音而賺青曰火狐、此

外又有白狐、灰狐、土人曰是黠音空狐音、黠者、年老作妖、作冠

枯顛、衣擗葉、幻人形、爲害甚大、又曰、老而妖者、名狻狐、亦名

靈狐、似猫、而黑蓋別一種、云、夜譚隨録ニ云、狐之類不レ有

雲、狐之別、或曰、是ノ黠、黠者、年老則妖、作云、或曰、老而妖

者、名狻狐、又名靈狐、似猫、而黑、北地多有之、蓋別一種、云、如

草狐、道、而最靈者、曰、長、狐、トアリテ、狐ノ類多シトイハトモ、

以テ名ヲ異ニスルノミ、タ、狻狐ハ別ノ一種ニテ、比方

ニ云フ、管狐ノ様ナレド、似猫、而黑トアレハ、亦自一種ナ

リ、管狐ハ大サ、鼯鼠ホドアリテ、目豎ニ付ク、其他ハスベ

テ、野狐ニ同ジ、但毛扶疎トメ、蒙戎夕ラザルナリ、管狐ヲ

驅役スルノ術、竹筒ノ管、竈ニ短ク用、前、後、無、節、吹、キ、比、ヌ、ス、レ、バ、  
ツタケ、云、ゾ、持、メ、咒、文、ヲ、誦、ス、レ、バ、狐、忽、チ、管、中、ニ、在、テ、所、問、  
ノ、コ、ト、ヲ、一、告、知、ラ、ス、コ、レ、ハ、モ、ト、修、驗、ノ、道、士、勤、行、精、  
修、ノ、後、ニ、金、峰、山、ヨ、リ、メ、授、ク、ル、所、ト、云、フ、故、ニ、管、狐、ノ、名、  
アリ、此、狐、駿、遠、三、ノ、北、邊、山、寄、ノ、地、ニ、多、シ、關、東、ニ、テ、ハ、上、  
毛、下、毛、最、多、シ、上、毛、ノ、尾、崎、村、ニ、至、テ、ハ、一、村、コ、ノ、狐、ヲ、畜、  
ハ、ザ、ル、家、ナ、シ、因、テ、狼、蹠、録、ニ、ハ、武、州、大、崎、ト、イ、フ、イ、ツ、レ、  
又、尾、崎、狐、ト、モ、云、フ、

善庵隨筆卷下 終

善庵隨筆附錄

鄭將軍成功傳碑

吾大東日本之人、以武勇勝於萬國、世所知也、夫以匹夫、馳勇  
名於西洋、耀武威於天下者、若濱田彌兵衛兄弟、於臺灣、山田  
仁左衛門於暹羅、勇則勇矣、義不知也、其併勇與義而有之、吾  
鄭將軍成功、蓋其人乎、成功初名森、小字福松、父芝龍、後號飛  
黃將軍、泉州南安縣人、祖翔宇、曾祖壽寰、世府椽、芝龍兄弟四  
人、芝龍即其長次、芝虎次、鴻達次、芝豹初、芝龍以妾故、失愛於  
父、父怒逐之、芝龍亾、奔一洋船、父猶罵言、尋出殺之、洋船又刻

時掛帆乃懇巨商帶往日本時年十八來艘返棹芝龍留在平戶再一年前艘又至及其返芝龍亦附歸焉至中途爲海盜所劫海盜卽顏思齊思齊海濱人稱日本甲螺率我邊民占臺灣地與群盜分十寨保焉思齊爲之魁至是入思齊黨一日一寨失主芝龍乃請一寨且曰若其貨物乞衆力爲我放一洋獲之有無多寡皆我之命思齊許之衆亦欣然相佐劫四艘貨物皆自暹羅來者每艘約二千餘金盡以畀芝龍於是芝龍之富冠九寨矣及思齊死寨無所統衆俱推芝龍爲魁時則通家耗輦金還家置蘇杭細軟兩京大內寶玩販海外諸國又屢往來平戶吾先公賜宅地於千里濱仍娶田川氏寬永元年七月二

十三日生成功後又生七左衛門於是芝龍寄貨與妻祭以平戶爲狡窟之地五年戊辰六月明兵部議招芝龍七月芝龍率所部降于督師熊文燦以其平廣盜征生黎焚荷蘭收劉香之功任都督從是以軍國事劇不復得至日本矣成功年已七歲芝龍請母子渡海者數矣官許遣之母以弟猶幼少不肯俱往成功風儀整秀倣儻有大志爲南安生員讀書穎敏不治章句先輩王觀光一見謂其父曰是兒英物非而所及也年十五入南京大學補弟子員試高等食氣二十人中聞錢謙益名執贄爲弟子謙益字之曰大木金陵有術士視之驚曰此奇男子骨相非凡命世雄才非科甲者成功每東向而望其母又屢致書

以迎之。二年乙酉四月十五日，母自長崎渡海，弟七左衛門、冒母氏移住長崎。時鴻達鄭彩兵敗南還，與閣部黃道周等擁立唐王于福建。改元隆武，封芝龍為平鹵侯，鴻達定西侯，俱加太師。成功年二十二，芝龍攜之。陛見，丰采掩映，奕奕耀人。帝奇之，撫其背曰：「惜無一女配卿，卿當盡忠，吾家無相忘也。」賜姓朱，改名成功，封御營中軍都督，賜尚方劍，儀同駙馬。自是中外稱國姓而不名。然芝龍以擁立非己意，日與文臣忤。又度帝必不能偏安一隅，時洪承疇招撫江南，黃熙胤招撫福建，皆晉江人，與芝龍同里。通聲問，密謀歸款。成功知而患之，帝亦知芝龍不可恃，無以制之。一日成功見帝，愁坐，胸塞口咽，跪奏曰：「陛下鬱鬱

不樂，得無以臣父有異志耶？臣受國厚恩，義無反顧，請以死扞陛下矣。」及兩浙敗，關門不戒，廷臣屢請命芝龍出關，芝龍亦知不出關無以厭衆心，乃分兵為二，一軍以鴻達為大元帥，出浙東，一軍鄭彩為副元帥，出江右。帝築壇于郊，送之。既出關，上疏稱餉缺不行，逗留月餘。帝下詔責曰：「倘畏縮不前，自有國法，乃不得已踰關，行四五百里，仍疏言餉絕，留住如故。」十二月，帝決意親征。二十九日，駐建寧。二年丙戌三月，幸延平府。五月，清兵渡錢塘。六月，封成功忠孝伯。楚撫何騰蛟、江右楊廷麟皆有疏迎帝，帝意欲往江右，猶豫未決。是時清兵渡江，錢塘不守，芝龍微聞之，因疏稱海寇狎至，須邀備禦。今三關餉取之，臣臣取之。

海無海則無家臣非往征不可拜表即行帝手勅留之中使奉  
敕至河而芝龍飛帆已過安平矣守關將施福聲言缺餉盡撤  
兵還安平自芝龍去後帝決計幸贛芝龍使軍民數萬人遮道  
號呼擁駕不得行芝龍因具表請回天與帝不得已駐劄延平  
芝龍百計阻之欲留帝以自重焉八月清兵已出韶州抵仙霞  
關仙霞嶺二百里無一守兵無一敵兵如入無人之境焉二十  
一日駕發延平二十七日入汀州二十八日清兵奄至帝崩于  
福州九月二十八日清兵至泉州先是芝豹至泉州閉城門大  
索餉皆計鄉紳家財勒取不應立梟之抵暮得數萬金俄而清  
兵至芝豹兵潰芝豹奔回安平成功母田川氏在泉州城獨不

退曰事既至此何愛一死登城樓自剄投水死成功聞之大號  
慟不自勝是時芝龍尚保安平軍容烜赫水陸畢備外雖示武  
而內已納款但恐以立福王爲罪故猶豫未敢迎清師貝勒王  
博洛仍遣芝龍所最善郭必昌而招之且囑以閩粵總督芝龍  
又自恃謂先撤關兵於彼有功閩粵總兵必可得也召成功等  
計事成功泣諫曰父教子以忠不聞以貳且北朝何信之有弟  
姪亦不願降皆勸芝龍入海曰魚不可脫淵不聽遂進降表十  
一月十五日至福州見博洛博洛握手甚歡折矢爲誓命酒痛  
飲三日夜半忽拔營挾以北矣從者五百人分隸各旗莫能相  
見博洛召成功成功不至芝龍既行鴻達鄭彩率所部入海芝

豹奉母居安平成功雖遇主列爵未嘗預兵事意氣容貌猶儒  
生也既遭國難諫父不聽且痛母死非命悲歌慷慨謀起義兵  
詣孔廟焚所著儒服拜先師仰天曰昔爲孺子今爲孤臣向背  
去留各有所用謹謝儒服庶先師昭鑒高揖而去所善陳輝張  
進施琅施顯陳霸洪旭等願從者九十餘人乘二巨艦斷纜行  
收兵南澳得數千人文移稱忠孝伯征討大將軍罪臣國姓十  
月永明王卽位于肇慶改元永曆四年丁亥成功遙奉永曆朔  
提師自南澳歸泊鼓浪嶼與廈門隔一帶水廈門金門俱隸  
南安爲兩島時鄭彩據廈門鄭聯據金門互相犄角八月成功  
與鴻逵合攻泉州敗提督趙國佐于桃花山追至城下副將王

進自漳赴援成功回島鴻逵艤舟泉港慶安元年戊子三月成  
功攻同安復侵泉州八月清授芝龍爲一等精奇尼哈番二年  
己丑正月成功募兵于銅山三月令施琅楊才黃廷柯宸極康  
明張英等攻漳浦尋下雲霄抵詔安屯分水關令黃廷柯等守  
盤陀嶺清兵來攻宸極死之七月永曆封成功延平公二年庚  
寅八月潮人黃海如陳斌邀成功入潮城守不可下遣甘輝殺  
賊黃亮采於峽山敗粵東邵提督于潮陽兵卻乃乘流揚帆直  
至廈門成功密與部下謀曰兩島吾家臥榻之側豈容人鼾睡  
時方中秋聯醉臥萬石巖不迎詰朝醉醒出見成功成功曰兄  
能以一軍見假乎未及對諸執銳者前矣聯唯唯而已於是麾

軍過聯船諸皆讐伏莫敢動聯亟竄入金門愬於彩彩知力不敵出避之成功并聯軍兵勢日盛海寇之在東南者盡歸心焉承應元年壬辰八月初芝龍在彼有子五人世恩世蔭世襲世默皆成功弟也芝龍入京惟世忠從焉于是芝龍以其祖父墳墓俱在福建請留繼母及弟芝豹子世恩各一人在彼其妻妾及諸子搬取來京詔允所請仍官在京一子世忠爲二等侍衛命芝龍書諭成功及鴻逵降許赦罪授官並聽駐原地方防勦浙閩廣東寇往來洋船令管理二年癸巳五月清封芝龍同安侯成功澄海公鴻逵奉化伯芝豹在都督芝豹隨母入京成功不受封寇掠如故三年甲午六月和碩鄭親王濟爾哈朗等議

鄭芝龍請以次子世忠與成功誼切手足若今與使臣同到成功處諭以君恩責以父命巽言婉導彼必欣然向化應從所請令世忠與使臣偕往可也從之十月復遣葉阿三滿員議撫成功不從葉阿歸報遂將芝龍芝豹等俱就寧古塔正法成功不顧十二月寇漳州十邑皆下略泉州不能破而還時鄭氏兵勢方盛乃分所部爲七十二鎮立儲賢館儲材館察言司賓客司設印局軍器諸局令六官分理庶事以潘賡昌爲吏戶官陳寶鏞爲禮官張光啓爲兵官程應璠爲刑官馮澄世爲工官改中左所爲思明州以鄧會知州事奉監國魯王盧溪王寧靖王居金門凡諸宗室頗給贍之凡有所覆空封拜輒朝服北向遙拜

帝座疏而焚之。明曆元年乙未三月，福建巡撫修國器，獲鄭芝龍與其弟鴻逵子成功交通私書，以上之。十二月，芝龍僕尹大器首其父子交通狀，敕芝龍自獄中以手書招成功，成功不降。議政王貝勒大臣會議，擬寧古塔地方近江海，成功賊船無所不至。芝龍禁後，恐有疎虞，應各用鐵鍊三條，手足扭錄，命章京兵丁嚴加看守，從之。永曆遣周金湯航海，晉成功延平郡王，成功乃議大舉入寇金陵。戊戌七月，以黃廷為前提督，洪旭為兵官，鄭泰為戶官，留守，部署諸將，遂引舟師抵浙江，攻陷樂清等邑。次羊山，為暴風漂沒，八十餘人，幼子從軍，亦溺焉。泊滄洲，理檝廢然返。己亥五月十三日，成功至崇明，諸將請先取崇明，為

老營，不聽。成功議曰：瓜鎮為金陵門戶，須先破之。於是率兵入寇，甲士凡十七萬，五萬習水戰，五萬習騎射，五萬習步擊，以萬人為往來策應，以萬人為鍊人，鍊人者披鍊甲，繪朱碧彪文，聳立陳前，砍馬足，最堅銳。侍郎張煌言為監軍。六月初一至初三，日蔽江而上。初八日，至丹徒。十三日，泊巫山。十五日，先以吉服祭大祖，次以鎬服祭先帝，祭畢，大呼高皇者三，將士及諸軍俱泣下。鎮江至瓜洲，江面十里，清用巨木築長壩，截斷江流，廣三丈，覆以泥，可馳馬。左右木柵有穴，可射砲石盤銃，星列江心，用圍尺大索牽接木壩兩端，以拒海舟。操江蔣國柱總兵管效忠副總高謙設兵嚴守鎮江，又于談家洲伏兵二千，列砲于上新



操江朱衣助六月十三日到任守瓜洲十五日海舟二千三百泊焦山先遣四舟揚帆而上清兵望見大發炮石海舟近霸從容復下清兵注射砲聲晝夜不絕凡發砲五日不傷一艘海舟既上復下循環數次一以誘清兵炮矢二以水兵藏內近霸即入水斫斷十六日度砲將盡悉舟過鎮江莫有過者十七日上瓜洲從後寨殺入清兵出禦蓋東門外有高岸騎布列鄭兵立兩旁水田中斫馬足大敗之鄭將劉某乘勝直追入瓜洲城大殺將沿江砲移向談家洲擊之兵立扎不定有海兵二千忽自江中浮上持長刀亂斫洲上兵走海舟以千人追殺復移洲砲擊鎮江告急于南京南京發兵洪承疇麾下羅將軍鐵騎千人

赴援其兵鐵甲如雪大言曰這些海賊不殺吾殺欲入江勦絕常州王總鎮無錫守備張科江陰守備施某羅將軍管提督等兵共九隊凡萬五千人而馬居半京軍僑躁急欲與戰而海舟忽上忽下清兵駐南則泊于北駐北則泊于南佯爲畏避以誘之清兵隨走三日夜不息露立江邊甚疲鄭兵前一隊五色旗第二隊蜈蚣旗第三隊狼烟第四隊倭銃第五隊大刀末後又另用一人敲鼓頭上插一旗如鼓聲緩則兵行亦緩鼓聲急則兵行亦急然多步卒清兵甚輕之凡騎兵遇步卒反退數丈加鞭突前敵陣稍動即乘勢殺入步卒自相踐陷騎兵因而蹂躪以此常勝至是亦用此法馳騎突前鄭兵嚴陣當之屹然不動

俱以團牌自蔽望之如堵清兵三卻三進鄭陣如山遙見背後黑烟冉冉而起欲卻馬再衝而鄭兵疾走如飛突至馬前殺入其兵三人一伍一兵執團牌蔽兩人一兵斫馬一兵斫人甚銳一刀揮鐵甲軍馬為兩段戰良久鄭陣中一將舉白旗一揮兵即兩開如退避狀有走不及者即伏于地清兵望見謂其將遁可以乘勢衝擊遂馳馬直前不虞鄭陣中忽發一大炮擊死千餘餘軍驚潰鄭兵馳上截前五隊騎兵圍之大殺羅部下白先鋒郎部下王先鋒歿于陣提督管效忠率滇南換班披甲數萬分道馳之鄭兵不動用長刀砍馬銳不可當退走銀山效忠留步兵守銀山騎兵移當大路成功以銀山迫府治為必爭之地

奪而據之陣以待明二十八日效忠復分五道三疊萃鄭壘騎射如雨成功令發大炮佐以金鼓屋瓦悉震清兵皆下馬殊死戰鄭兵益奮時鄭將列一陣效忠望見謂麾下曰此八卦陣也生門向江宜從此攻入開門而出及入即變為長蛇陣擊首尾應擊尾首應遂圍效忠效忠見軍不利負旗而遁效忠馳至城濠鄭兵飛走隨至諸軍皆散效忠出兵四千僅存百四十人嘆曰吾自滿州入中國身經十七戰未有若此一陣者常州主鎮兵三百存三十七人高謙五百存八十騎入鎮江登城閉守效忠走南京而蔣國柱走丹陽鎮江守將高謙知府戴可進等降成功登峴山大饗士卒令全斌及黃昭等守鎮江澄世署道事

屬邑皆下，甘輝曰：瓜鎮爲南北咽喉，但須坐鎮於此，斷瓜洲，則山東之師不下，據北固，則兩浙之路不通，南都可不勞而定矣。不聽。竟薄金陵，郎廷佐聞鄭兵將至，將城外屋悉行燒拆，近城十里，居民俱令入城，斂兵閉守。七月八日，鄭兵至，結營白土山，距南京儀鳳門七里，以黃安總督水師守三义河口，成功由儀鳳門登陸，令諸舟一字列，斫于江東門外，親率騎兵歷城下，度營壘安設，大砲地雷密雲布梯，復造木柵，欲以久困之。成功與五親軍屯岳廟山，留前鋒鎮中衝鎮，屯獅子山。甘輝進曰：夫兵貴先聲，彼衆我寡，及其燭且未定，其勢空拔，若彼集禦固，緩難圖也。君必悔之。不聽。退而告人曰：吾不復此矣。十七日，清兵千

騎薄前鋒營，余新擊敗之，遂輕敵不備。縱酒爲驩，成功聞之，令張英馳讓新，猶如故。煌言與輝並亦苦諫，復不納。二十三日，夜梁化鳳由儀鳳門穴城出，銜枚疾走，復薄新營，新不及甲倉皇出拒，尋皆遊江而走。成功聞砲聲，遣翁天祐馳援，已無及矣。二十四日，清以步兵數千直擣中堅，成功擊敗之。廷佐以騎兵數萬從山後出其背夾攻之，猝不及備，遂大傷。成功急麾兵退，以舟遜獨甘輝且戰且走，至江騎能屬者三十餘，凡所擊殺數千百人，馬躓被執，不屈死，最烈矣。二十五日，還鎮江。二十九日，成功議還島，使馬信韓英督舟師堵守江口，周全斌黃昭吳豪爲後殿，餘軍次第登舟而還。八月五日，至吳淞港。九日，攻崇明，不

下棄而歸十月還島痛哭甘輝而後入曰吾早從甘輝之言不及此祠忠臣廟以輝為第一三年庚子五月清命將軍達素總督李率泰部分滿漢軍兵大船出漳州小船出同安以廣東降將為導成功以陳鵬督諸部守高崎過同安兵鄭泰出涪州過廣東兵自勒諸部扼海門一日東風盛猛一海皆動北人不諳水性眩暈不能成列成功手自褰旂引巨艦橫擊之清兵棄船登圭嶼鄭亦登攻鏖戰斬獲無算將軍達素還福州自殺於是竟成功之世無覆島者然成功以廈門單弱亟思招地適日本甲螺何斌與荷蘭會長有隙自臺灣走廈門見成功盛陳臺灣富强為四省要害且言可取狀成功大喜振舵東甲于是遂行

三月泊澎湖至鹿耳門水淺沙膠海道紆折不得入適水驟漲丈餘大小戰艦銜尾而進乃攻赤嵌城克之遂圍王城堅守不下乃環山列營以困之十月清棄芝龍於柴市鄭氏子孫在京者無少長皆伏誅十二月荷蘭窮以十餘艘決戰成功用火攻盡焚之然終無降意成功使人告之曰臺灣即先人故地當歸於我若珍寶不急之物聽汝悉載去荷蘭乃降成功既有臺灣改臺灣為安平鎮以赤嵌城為承天府總名曰東都設府一曰承天縣二曰天興曰萬年寬文二年壬寅五月成功卒年二十九時長子經出守廈門六月訃至經自稱招討大將軍嗣立領兵還臺復至廈門以翁天祐為轉運使任以廈門政三年癸卯

永曆計至，經猶奉正朔，稱永曆十七年。於是清主銳意南征，遣人約紅夷，合兵攻島。十月，耿繼茂率李率泰滿帥郎賽調合紅夷舟出泉州，馬得功出同安，黃梧施琅出漳州，分道疾進。經部分死士，令全斌禦之。全斌以二十艘，往來奮擊，剽疾如飛。紅夷砲無一中者。諸軍雲翔而不敢進，得功先至，為全斌所殪。既而大軍大集，眾寡不敵，退保銅山。清兵入島，墮城而兩島之民爛焉。四年甲辰三月，改東都為東寧府，陞天興萬年二縣為州。前後招納諸省兵民以實之。然南風不競，勢日稍蹙。猶能擁孤軍與大清相抗者十九年，大小數戰，殺傷相當，亦非義勇所能致哉。天和元年辛酉正月，經卒，年三十四。猶奉永曆正朔，佩招討

大將軍印，稱世子。長子克壑，舊為監國。克壑實非鄭氏，出本姓李。經妾竊養，以為經子。其事秘，經不知也。克壑嚴毅，頗倣成功。諸弟畏之，揚言曰：克壑非吾骨肉，一旦得志，吾屬無遺類矣。經母董氏，即命收監國印，幽諸別室。諸弟夜拉殺之。董氏立次子克塽。時年十二。六月，經母董氏卒。越二年癸亥六月，靖海將軍施琅率舟進討，自銅山抵澎湖，入罩灣，連克虎井桶盤諸嶼。克塽勢不支，決計納款。八月，詣軍門降。詔赴京師，授漢軍公。鄭氏自成功初起，迄克塽，凡三世。三十八年而明朝亾。明末之亂，清兵百萬，乘運亂入中國。當此時，世臣名家屈膝乞降，辮髮自甘，不知愧也。成功獨據孤島，存故國衣冠于海外，奉其正朔，以恢

復為狂雖志不遂而三十八年之久猶保明統於不絕矣是可  
不謂義乎又可謂勇乎吾乾齋公勇乎見義而為之故以成  
功有勇有義不愧其為日本人命鼎作之傳勒石於千里濱以  
存古蹟蓋亦奉先公賜宅地之意也謹作鄭將軍成功傳碑

常陸 日下部翼

門人 上總 古川 政 全校

越前 有馬 峻

善庵隨筆附錄終

跋

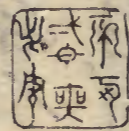
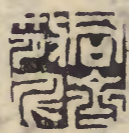
先子曰清文敏識著述盈室夙馳名  
聲於藝林年伯德立忽發喘疾爾後  
雖或少安訖弗全瘳而教授講論兀  
窮年未嘗少廢怠如是者幾三十餘年  
矣戊申初夏宿病頓熄起行寧法於乞  
治尚書典謨將作之解覃思研精致搜

善居陸筆  
討。取正舊說。靡遺餘力。歲晚二典解。纔  
成。而病疾復動。是以其餘未竣。功亦止。然性  
好撰述。病間有所得。輒授筆。悉錄。上自  
古昔。規制矩度。人物稱謂。下至草野奇怪。  
俚諺童謠。咸有所考。正焉。命曰善庵隨  
筆。是不說之類。特先子之緒餘耳。然小  
說九百。亦居九流之一焉。古賢輔之相天也。

輯邦國下民之俚謠巷歌。以察人情。邪  
正。且督政令之得失。而致盛大之治。則是書  
不特可使學者考時尚之。美惡。詳世故之  
變遷。以資博洽。且於國家清明之治。亦不  
少補也。書賈玉巖嘗請上梓。先子未及許之。  
而逝。頃廢。與同志校雠魯魚。為揭示題目。  
以便展閱。乃敢付之。若夫二畫解及其他。

經說文辭。則先子苦心撰著。畢生精神。所寓。在子孫。固不可不廣其傳。然卷帙浩瀚。未易遽從事也。故先刻是書。為之兆爾。己酉孟秋。

不肖履識并書



朝川鼎著

嘉永三年庚戌七月

發兌書林

横山町三丁目

和泉屋金右衛門



